

## 第三節 永良部世之主と北山滅亡

沖永良部の歴史において記録に見る最初の人が、「永良部世之主」である。北山王（今帰仁城主）攀安知が中山の尚巴志軍に攻撃され自殺するのが一四一六年（室町四代義持・応永二十三）であり、世之主の自決は同年か翌年と推定される。

琉球史では、九世紀に村落共同協力社会が崩壊して支配・被支配の階級分化し、十一世紀末に至って小地域の政治的統率者⇨按司が発生したと言い、さらに勢力抗争は進んで地域は拡大し、一三二四年（鎌倉時代末期）ごろには中山・南山・北山の三山対立状態に入る。永良部世之主は北山系であり、その悲話は約百年後の三山抗争末期に当たるわけであるが、三山支配者の推移、根拠地と主要港、末期の勢力範囲（間切）、大陸関係を表示すれば、悲劇に至る運命がしのばれると思うのである。

### A 中山（浦添世の主—中山王）

(一) 舜天王統（一一八七—一二五九）

（源為朝）—①舜天—②舜馬順熙—③義本

(二) 英祖王統（一二六〇—一三四九）

①英祖—②大成—③英慈—④王城—⑤西威

一二六四 久米・慶良間・伊平屋の各島入貢

一二六六 大島諸島入貢

一二九一 世祖フビライ汗の元軍来攻…一二九六再

侵、いづれも成功せず。

(三) 察度王統（一二三三—一四〇六）

奥間大親—①察度—②武寧

（妻⇨天女伝説）

一二七二 明の太宗に初めて進貢（以後毎年）。太陽暦

下賜。

一三八三 中山王号下賜（南山・北山も進貢）。

一三九〇 宮古・八重山の入貢。

一三九二 中山王および山南王留学生派遣。そのころ

福建人三十六姓帰化（久米村）。朝鮮へ二回

使者派遣—南海貿易も開拓。

一四〇四 武寧、明の成祖永楽帝より初めて冊封（山

南王も同じ）

(四) 第一尚王統（一四〇六—一四六九）

①尚思紹—②尚巴志…⑥尚泰久—⑦尚徳

一四〇二 佐敷按司尚巴志、大里按司を討ち東四間切を制す。

一四〇六 尚巴志、中山王武寧を滅し、父思紹を王と

す。以後毎年明へ進貢—朝鮮・室町幕府・

シヤムと交渉あり。

一四二六 山北王攀安知を討滅。

一四二九 山南王、他魯毎ルン、イを滅す⇨三山統一。首里王

府整備土木事業、南海・朝鮮・日本と意欲的に交易。

○支配地域（間切）

浦添城…浦添・泊・那覇・真和志・南風原・西

首里城 原・中城・越来・北谷・読谷山・勝

連・具志川

牧港—泊—那覇

**B 南山**（しもの世の主・山南王）

○南山（山南）王統（年代に諸説あり。一四二九滅亡）

①大里按司—②大里按司—③承察度ウフサト—承察度

「江英紫」④汪応祖⑤他魯每

一三八〇 承察度 明に初進貢……一三九二初めて  
留學生派遣

一四〇四 汪応祖・成祖の冊封（山南王）  
汪応祖、他魯每時代、進貢貿易に努む。

○支配地域（間切）

南山城：東四間切（大里・佐敷・知念・玉城）  
（別に大里グスク説あり）

島尻七間切（具志頭・東風平・摩文仁・  
喜屋武・真壁・高嶺・豊見城）

糸満港

○北山（山北王）

○北山王統（冊封なく不明な点多し）一四一六滅亡  
今帰仁按司―（不明）―怕尼芝―珉―攀安知



一三八三 怕尼芝初めて進貢―一三九〇まで。

一三九五 珉進貢（一回）一三九六珉没し攀安知代わる。

○支配地域（間切）

今帰仁城：今帰仁・羽地・名護・金武・国頭の五

親泊港

間切、伊江・伊平屋・与論・沖永良部の島々

山北・北山とは沖縄本島の北部を意味し、地勢は山岳多く（山原）嶮岨で人心剛毅で知られる。

中山の察度、山南の承察度、山北の怕尼芝は相共に明の太祖洪武帝の招撫に応じて朝貢し、大陸の文物を入れて生産を向上し民生を安定するに努め、留學生を派遣して文化の進展を競った。なかでも中山地域は豊饒で生産力に恵まれ、優位に立ったと思われる。後の尚巴志の三山統一までの約半世紀の間、三者の明国への進貢回数・留學生数は次のとおりである。

中山 五十二回（約一年一貢） 二十人

山南 十八回（二年一貢） 四人

山北 九回（五年一貢） 〇人

明史琉球伝に見る「中山益々強く、其国富めるを以て一歳常に再貢三貢」、「山北最も弱く、故に其朝貢亦最稀」のように、国頭地方を地盤とする山北の劣勢はやむをえない。一四一六年中山勢の北伐に際し、諸按司の離反あり、城中の部将本部大原の内通などで滅亡に至るが、大勢抗し難きものあるを認める。